

# 平成27年度「逗子市学習状況調査」の分析結果(中学校)

## 〇はじめに

平成 27年4月21日に「逗子市学習状況調査」が行われました。この調査は、逗子市の生徒の学習状況を把握・分析し、各学校の指導方法の工夫・改善および生徒の学習に役立て、市として必要な施策の策定に資するために行われたものです。実施内容は、市内中学校2年生を対象とし、国語、社会、数学、理科、英語の5教科で、神奈川県  
の調査問題をもとに行われました。この分析結果を踏まえ、各学校において今後の指導方法の工夫と改善を図り、本市において教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図るよう努めたいと思います。

なお、ここでの学力とはこの調査で測ることができた学力の一部であり、子どもたちのもつ学力全てを示すものではありません。

## 〇実施状況

- (1)調査実施日 平成 27年4月21日(火)
- (2)実施教科 教科に関する調査(国語、社会、数学、理科、英語)
- (3)実施学校・学年・調査数 逗子市立中学校2年生 345名

## 〇各教科の調査結果の概要(中学2年)

各教科の調査結果について以下に示す。正答率では、国語が最もよく65.0%と高い数値を示している。英語、社会、数学では、それぞれ61.4%、57.8%、54.4%と5割～6割前後となっており、理科については51.1%と最も低い数値となっている。

表 各教科の調査結果(正答率)

教科	調査生徒数	平均正答率
国語	343名	65.0%
社会	345名	57.8%
数学	343名	54.4%
理科	345名	51.1%
英語	345名	61.4%

# 国語

- ・国語は、調査生徒数343人にて実施をした。その結果、平均正答数14.3問、平均正答率が65.0%、平均正答率が60%以上の生徒は全体の6割以上を占めていることから、生徒に対して学習内容が概ね定着していると考えられる。
- ・観点別の平均正答率については、「書く能力」(1設問)が58.6%、「読む能力」(10設問)が51.8%、「言語についての知識・理解・技能」(12設問)が76.4%と概ね良好な結果となっている。
- ・「書く能力」の設問について平均正答率を見ると、『条件に合わせて自分の考えを書く』に関する問題が58.6%となっており、苦手とする生徒がまだある程度いることから、もっと多くの生徒に理解を高めてもらう必要がある(問四)。
  - ・「読む能力」については、『部分的内容の理解』『文章の構成や展開・表現の特徴の把握』においてそれぞれ67.3%、67.6%と比較的高い正答率となっている(問三(4)、(5))。一方、『場面や登場人物の描写の理解』については21.0%となっており、場面の展開や登場人物などの描写や会話に注意して読み、その場面における心情を理解するといったことに対して苦手としている生徒が多いことがわかる(問二(2))。
- ・「言語についての知識・理解・技能」については、『漢字の読み』が75.8%以上とそれぞれ高い正答率となっている(問一(1))。一方、『漢字の書き』で一部の問題で51.3%と低いものがあることから漢字の読みについては良いが書くことに対して苦手としている生徒がいるため、漢字を書く能力を高める必要があるといえる(問一(2))。

## 調査結果を踏まえた指導の工夫・改善

書く能力について	○授業では、書いたものが目的にあった内容・構成であるか、推敲する習慣を身に付けさせる必要があります。生徒同士が互いに書いたものを読み合い、意見を述べたり助言をしたりして交流する学習活動も効果的です(問四)
読む能力について	○授業をきっかけに、生徒が広く物語や小説等の文学作品の読書に臨む意欲が高まるようにしていくことを心がけましょう。普段の授業から、場面の展開に注意しながら、登場人物の性格や心情の変化、情景などについて、叙述に即してとらえ、考えさせるよう、効果的な指導の工夫・改善を継続していくことが大切です。また、登場人物の心情の変化や作品の表現効果等について、ねらいを明確にした適切な学習課題を設定し、生徒が相互に意見を交流する活動を適宜交えつつ、考えさせ発表(説明)させる場面を取り入れた、課題解決的なスタイルの授業を展開していきましょう(問二)
言語についての知識・理解・技能について	○学習指導要領では、学年別漢字配当表の漢字1006字について、第3学年までに「文や文章の中で使い慣れること」としています。日ごろから必要に応じて辞書が引けるように準備をさせるなど学習環境を整え、分からない漢字や曖昧な漢字は辞書で確かめさせるような習慣をつけましょう。(問一(2))

# 社会

- ・社会は、調査生徒数345人にて実施をした。その結果、平均正答数15.0問、平均正答率が57.8%、平均正答率が60%以上の生徒は全体の5割程度となっていることから、各生徒に対して学習内容のより一層の定着を図る必要があると考えられる。
- ・観点別の平均正答率については、「社会的な思考・判断・表現」（5設問）が50.7%、「観察・資料活用の技能」（6設問）が59.1%、「社会的事象についての知識・理解」（15設問）が59.7%と比較的良好な結果となっている。
- ・「社会的な思考・判断・表現」の各設問について平均正答率を見ると、『世界の様々な地域』に関する問題が71.9%と比較的多くの生徒に理解されている（問三（4））。一方、『古代までの日本』に関する問題の一部では37.4%となっており、撰関政治についての仕組みを考え、資料をもとに判断することを苦手とする生徒が多いことがわかる（問五（6））。
- ・「観察・資料活用の技能について」については、『世界の様々な地域』が75.7%と高い正答率となっている（問三（3））。一方、『世界の地域構成』の一部の設問については33.3%と低くなっており、世界の位置関係をとらえるための基礎的な知識・技能を身に付けていない生徒が多いことがわかる（問一（5））。
- ・「社会的事象についての知識・理解」については、『古代までの日本』の『班田収授法』に関する設問で78.0%と高い正答率となっている（問五（1））。一方、『世界の地域構成』の『世界の国々の名所と位置』に関する設問では43.2%と比較的低く、世界の特色ある国々の名称と位置に関して基本的な知識を身に付けられていない生徒が多いことがわかる（問1（4））。

## 観点別にみた指導の工夫・改善

社会的な思考・判断・表現について	<ul style="list-style-type: none"><li>○各時代の学習をする際に、その時代の特色や人物、文化の特徴等を年表や図表、フローチャート等を用い、その時代を大観して学習することが効果的です。（問四（5））</li><li>○撰関政治の最盛期である藤原道長、頼通らの時代の藤原氏の系図を読み取って説明ができるようにしていくなど、資料や題材から読み取りを行うことは、それぞれの時代の歴史学習の理解が深まり非常に有効です。（問五（6））</li></ul>
観察・資料活用の技能について	<ul style="list-style-type: none"><li>○さまざまな目的で作られた地図と実際の形状に近い地球儀とで、距離や国などの形を比較したりする等の活動を取り入れると効果的です。また、小学校においても地図や地球儀を活用する機会があったことを踏まえ、そこで得た技能を生かしながら中学校での学習を進めていくようにしましょう。（問一（5））</li></ul>
社会的事象についての知識・理解について	<ul style="list-style-type: none"><li>○世界の地域的特色の学習全体を通して、大まかに世界地図を描けるようにしていくことや、実際に地球儀や世界地図を見ながら確認し、緯度や経度を利用して国々の位置を探ること等が有効です。（問一（4））</li><li>○時代の特色を理解するためには、時代名や中心地を単に覚えるだけではなく、その時代の政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色等について、他時代との共通点や相違点に着目させながら、その時代の特徴を大きくとらえさせることが大切です。（問五（2））</li></ul>

# 数学

- ・数学は、調査生徒数343人にて実施をした。その結果、平均正答数17.4問、平均正答率が54.4%、平均正答率が60%以上の生徒は全体の約4割程度となっていることから、各生徒に対して学習内容のより一層の定着を図る必要があると考えられる。
- ・観点別の平均正答率については、「数学的な考え方」(6設問)が40.6%、「数量や図形などについての技能」(19設問)が55.6%、「数量や図形などについての知識・理解」(7設問)が62.8%と概ね良好な結果となっている。
- ・「数学的な考え方」の各設問について平均正答率を見ると、『資料の傾向』に関する問題が62.1%と比較的多くの生徒に理解されている(問七(2)(校名))。一方、同じ問題の理由についての回答は24.2%と低く、資料からその傾向を適切に説明を行うことを苦手とする生徒が多いことがわかる(問七(2)(理由))。それ以外の設問についても正答率が約3割となっており、多くの生徒が苦手としていることがわかる(問三(4)、問四(3))。
- ・「数量や図形などについての技能」については、『加法』に関する問題が95.6%、『加法と減法』に関する問題が83.1%と多くの生徒に理解されている(問一(1)(2))。一方、『円柱の表面積』『円錐の体積』に関する問題ではそれぞれ34.1%、33.8%となっており、立体の面積や体積の算出を苦手とする生徒が多いことがわかる(問六(2)(3))。
- ・「数量や図形などについての知識・理解」については、『比例』が73.8%と比較的高い正答率となっている(問四(1)(ア))。一方、『直線の位置関係』が56.3%と比較的低く、直線と直線との位置関係の中においてねじれに関することが十分に理解ができていないという生徒が多いことがわかる(問五(3))。

## 観点別にみた指導の工夫・改善

数学的な考え方について	○総度数が異なる資料を比較しその傾向をとらえる場合、相対度数は大変有効であることをしっかりと理解させましょう。相対度数をはじめとして、度数分布票やヒストグラム、代表値など、資料の整理を学習する際には様々な方法を学習します。それらは、それ自体を作ったり求めたりすることが目的ではなく、それらを用いて資料の傾向を読み取ることが重要であるということを意識して指導しましょう。(問7(2))
数量や図形などについての技能について	○円の面積の求め方については小学校算数科で学習しているので中学校数学科では、その学習を振り返り、学び直すとともに、公式を再確認させましょう。その際、円周率 $\pi$ を含む式の表記についても併せて指導しましょう。また、側面の長方形の縦と横の長さが、それぞれ円柱の高さと底面の円周の長さとなっていることをしっかりと理解させましょう。そのためには、展開図を切り取って実際の立体を作ってみるなどの体験的な活動を行うとよいでしょう。(問六(2))
数量や図形などについての知識・理解について	○空間においても直線が2点によって決定されること、平面が同一直線上にない3点、一つの直線とその上にない1点、交わる2直線によって決定されることなどを理解できるように、指導しましょう。ねじれの位置については、身の回りにある具体的なものを例として、交わってはいないが平行でもないことを視覚的にとらえさせましょう。その際は直方体や立方体などの例だけでなく他の角柱や角錐など多様な立体も取り入れて指導しましょう。(問五(3))

# 理科

- ・理科は、調査生徒数345人にて実施をした。その結果、平均正答数19.9問、平均正答率が51.1%、平均正答率が60%以上の生徒は全体の約4割となっていることから、各生徒に対して学習内容のより一層の定着を行う必要があると考えられる。
- ・観点別の平均正答率については、「科学的な思考・表現」(11設問)が51.4%、「観察・実験の技能」(10設問)が41.9%、「自然事象についての知識・理解」(18設問)が56.6%と一部を除き、概ね良好な結果となっている。
- ・「科学的な思考・表現」の各設問について平均正答率を見ると、『物質のすがた(密度の計算をして物質を特定する)』に関する問題の64.1%が最も高い結果となっている(問六(3))。一方、『光と音(音の速さを求める)』や『地震の重なりと過去の様子(地層のできる順)』に関する問題ではそれぞれ20.3%、29.0%となっており、これらの内容についての理解が不足している生徒が多いことがわかる(問七(1)、問十(4)(理由))。
- ・「観察・実験の技能」については、全体的に正答率が低く、『状態変化(ガスバーナーの使い方)』に関する問題では21.2%となっており、ガスバーナーの使い方を苦手とする生徒が多く(問四(1))、また、『力と圧力(力の大きさの表現)』や『火山と地震(グラフの読み取り)』においても正答率が20%台となっており、理解が不足している生徒が多いことがわかる(問八(4)、問九(2))。
- ・「自然事象についての知識・理解」については、『火山と地震(P波とS波)』が84.9%と高い正答率となっている(問九(1))。一方、『火山と地震(グラフからP波の速さを求める)』では16.8%と低く、地震の揺れの伝わる時の速さについて、まだ十分に理解ができていない生徒が多いことがわかる(問九(3))。

## 観点別にみた指導の工夫・改善

科学的な思考・表現について	<ul style="list-style-type: none"><li>○設問のように、実際にグラウンドに生徒を並べ、雷管の音が聞こえたら手を挙げる実験等を取り入れることが効果的です。(問七(1))</li><li>○地層を立体的に理解させるために、標高の異なる2地点の柱状図を用いて、地層のつながりを図示することが効果的です。また、断層のでき方を色の違う粘土等を用いて、実際に断層を作る活動が考えられます。(問十(4))</li></ul>
観察・実験の技能について	<ul style="list-style-type: none"><li>○操作の根拠を示すためにガスバーナーを分解し、ガスと空気が混合する仕組みについて理解させる活動が考えられます。(問四(1))</li><li>○身近な物体にはたらく重力について矢印を書いて表す活動が考えられます。(問八(4))</li><li>○各地の地震計の記録をもとに、地震が発生した時刻や2つの波の伝わる速さの違いを見いだす活動が考えられます。(問九(2))</li></ul>
自然事象についての知識・理解について	<ul style="list-style-type: none"><li>○グラフ等のデータからわかることを、ペアやグループで話し合わせるなどの活動が考えられます。(問九(3))</li><li>○代表的な堆積岩を観察させ、特徴を表にまとめさせる活動が考えられます。(問十(2))</li></ul>

# 英語

- ・英語は、調査生徒数345人にて実施をした。その結果、平均正答数20.9問、平均正答率が61.4%、平均正答率が60%以上の生徒は全体の約5割を占めていることから、生徒に対して学習内容が概ね定着していると考えられる。
- ・観点別の平均正答率については、「外国語表現の能力」(14設問)が46.4%、「外国語理解の能力」(16設問)が49.1%と低くなっている一方、「言語や文化についての知識・理解」(18設問)が72.4%と概ね良好な結果となっている。
- ・「外国語表現の能力」の各設問について平均正答率を見ると、『文字や符号の識別、語と語の区切り』に関する問題がそれぞれ約7割程度とある程度、多くの生徒に理解されている(問三)。一方、『運用度の高い語』や『文と文のつながりなどに注意した文の記述』に関する問題では多くの設問で4割未満となっており、これらの内容を苦手とする生徒が多いことがわかる(問六、問八(2))。
- ・「外国語理解の能力」については、『文の大切な部分の正確な読み取り』に関する問題が88.4%と多くの生徒に理解されている(問四(2))。一方、『運用度の高い語』や『文と文のつながりなどに注意した文の記述』に関する問題では多くの設問で4割未満となっており、これらの内容を苦手とする生徒が多いことがわかる(問六、問八(2))。
- ・「言語や文化についての知識・理解」については、全体的に正答率が高く、『be動詞の平叙文』や『疑問詞で始まる文』でそれぞれ96.8%、87.2%となっている(問一(1)(6))。一方、『what+名詞～』が42.0%と比較的低く、what+名詞で始まる疑問文の文構造について、十分に理解ができていない生徒が多いことがわかる(問五(3))。

## 観点別にみた指導の工夫・改善

外国語表現の能力について	○指導する語は、具体的な場面や状況で適切に用いるようにして定着を図ることが大切です。また、「コミュニケーション能力の基礎を養う」とする観点から、授業の中でよく用いられる語については、言語活動の中で繰り返し触れながら定着させることが効果的です。(問六(1)(3)(4))
外国語理解の能力について	○授業においては、英文を正しく書く練習をするとともに、文と文のつながりを意識した、まとまりのある「文章」を書く活動も必要です。その際、指導者は具体的でわかりやすい場面や状況を設定したり、場面や状況に合わせた表現を例示したりするなど、指導方法に工夫を加えて授業を進めてください。(問八(2)) ○指導の際には、読解の手掛かりとなる語句や表現をヒントとして与えたり、事前に内容を尋ねる質問をしたりするなど、生徒の思考を補う工夫をすることが効果的です。また、教材を選定する際には、日常的な内容を書いた英文に加え、日記・手紙・新聞記事など様々な種類の英文を読み取る活動が考えられます。(問四(1))
言語や文化についての知識・理解について	○日常の習慣について、英語で話したり書いたりする機会を多くつくり、活用を通して定着を図りましょう。(問五(1)) ○授業の中で、生徒が継続して後置修飾の表現に触れる機会をつくり、自然に理解できるようにして発話、作文等の表現活動につなげるようにしましょう。(問五(2)) ○動物以外にも、色、食べ物、スポーツ等いろいろな話題で表現しあえる機会を多く作りましょう。(問五(3))